



写真13 調査区3全景（上が北）

3. 十八番門の調査

調査区4は長柄櫓の東側における、地山や江戸時代の地面、および十八番門の地下遺構の残存状況の確認を目的として設定しました。

十八番門は長柄櫓の南東に位置する門です。絵図からは、門は櫓門で、基礎部分に石垣があり、その上に櫓がのっていたことがわかります（写真14）。今回の調査は門の北側のみでしたが、表土を除去すると、門の基礎にあたる石垣が確認されました。確認されたのは一段のみであることから、石垣の最下段にあたる石と考えられます（写真15）。この部分の地山の高さを確認するため、部分的に深く掘削したところ、地山は調査区の北側では地表面から50～30cmで検出しましたが、そこから南側



写真14 十八番門（赤丸）（「津山絵図」より）



写真15 調査区4全景（東から）



写真16 調査区4地山検出状況（東から）



写真17 調査区5全景（南西から）

に向かって急激に下がっていることが判明しました（写真16）。調査区南側でも確認したところ、地表面から約1.4～1.7mのところ検出されました。土層の観察からは、十八番門の基礎の石垣は地山に盛土や整地をした上で据えられていたことがわかりました。

4. 十八番門北側の調査

調査区5は十八番門跡の北側斜面に設定しました。この部分は、廃城の際に石垣を崩したという言い伝えがあり、石垣の遺存状況を確認するために調査を行いました。深さ1m近く掘削しても栗石が検出されるのみであったため（写真17）、調査を終了しました。

今年度の調査では、長柄櫓周辺の地山の高さや、長柄櫓の石垣背面が盛土であること、十八番門の東西方向の規模などが明らかになりましたが、まだ不明な点も多くあるため、来年度以降も調査を継続する予定です。

発行年月日 令和5年3月31日
 編集・発行 津山市観光文化部文化課
 〒708-0824 岡山県津山市沼600-1
 TEL (0868) 24-8413
 印刷 株式会社 NCP サプライ



写真1 二の丸東側石垣（東からドローンで撮影）

二の丸東側石垣修理工事が終了しました

令和元年度から実施している二の丸東側石垣の修理工事が令和5年3月に終了しました。

令和元年12月の工事開始から足かけ4年、津山城のこれまでの石垣修理工事のなかで最大規模の工事となりました。本号では、工事着手から終了にいたるまでの工程について紹介します。

なお、二の丸東側石垣修理工事についての詳細、および石垣解体に伴う発掘調査の成果等については、「津山城だより」No.24～No.26をご覧ください。

「津山城だより」のバックナンバーは津山市のホームページにも掲載していますので、ぜひご覧ください。

あわせて、今年度からあらたに実施している三の丸西側の長柄櫓石垣周辺の発掘調査についても紹介します。

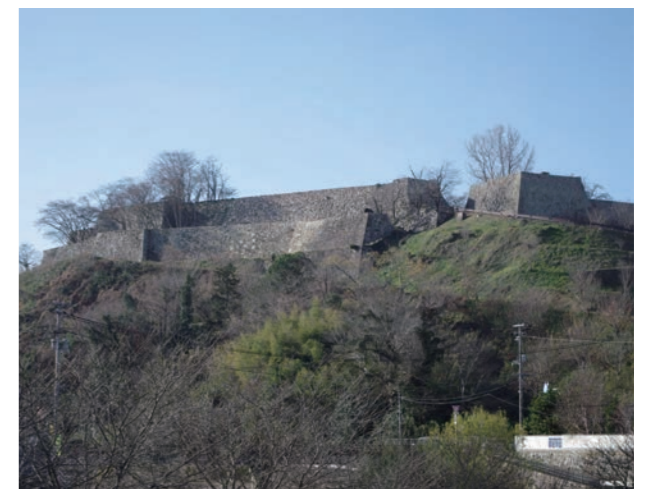


写真2 修理工事の終了した石垣（遠景、北東から）

令和の石垣修理

工事の内容

令和元年度：樹木伐採、足場組立、石垣番付、発掘調査

令和2年度：石垣の解体、発掘調査

令和3年度：石垣の解体、発掘調査、石垣の復旧

令和4年度：石垣の復旧、足場の解体

解体修理工事では、番付した石を、上下左右の位置関係を確認しながら一つずつ解体しました。この作業と並行して、背面の栗石と盛土も掘削して下げて行きました。解体の際には、石垣の表面を構成する石（築石）一つ一つの大きさや材質、破損状況、重量、刻印の有無などを記した石の「カルテ」を作成し、修理の内容が分かるようにしました。

修理工事では、築石は基本的に解体前の位置に積み直しましたが、割れていたり、ヒビが入っていて使えないものは新しい石に取り替えました。また、昭和40、41年の修理で使われていた花崗岩は、津山城の石垣に使われている凝灰岩（＝津山石）でないため、津山城の本来の石垣に戻す方針に基づき、凝灰岩に取り替えました。石垣背面の裏栗石は、津山城の場合、拳大の河原石がほとんどで、割石はほぼ使われていません。今回の修理の際にも、裏栗石には河原石を使用し、その背面には石灰を配合した土を入れながら復旧を進めました。栗石の空隙については、碎石を入れました。

石垣解体の際に石垣の背面からあらたにみつかった石垣や、石組みの排水溝（石垣上から5段目に穴の空いた部分）についても築石と同様に積み直しを行いました。

石垣の天端については、背面からみつかった石垣の存在が分かるよう、石の上面が地表面に出るように埋め戻しました。また、昭和40～41年に石垣修理を行った範囲は、石垣背面の遺構は残っていませんが、本来は他の場所と同様、背面に2～3段の石垣があったと想定されるため、石垣が存在していたことが分かるように、石を一段並べました。

石垣の天端（上面）については仮の復旧であるため、不織布を敷いています。この場所を含む周辺の排水がうまく行えるよう検討した上で、整備を行う予定です。

今回の二の丸東側石垣修理工事により、これまで大きく孕んでいた部分については解消され、石垣が健全な状態に復旧されました。

修理を終えた石垣は、遠くからもよく見ることが出来ますので、ぜひ足を止めて、石垣を眺めてみて下さい。



←写真3 石垣解体
隣接する石との位置関係や、設置接する面や点を確認しながら解体を行いました。

写真4 石の型取り→
花崗岩の築石は凝灰岩に取り替えるため、同じ形になるよう型取りをしました。



←写真5 埋没石垣
石垣の解体とともに背面を掘削していくと、埋没していた石垣が出現しました。

写真6 石垣最下段の状況→

石垣の最下段は、地山を掘込み築石を据え、前面に栗石と同じ河原石が詰められていました。



←写真7 排水溝の背面状況
解体の際確認された石垣内部の排水溝については、復旧の際も同様に積み直しを行いました。手前の大きな石が排水溝の蓋石です。

写真8 碎石を充填→
復旧の際には、栗石（河原石）だけでは隙間ができ、栗石が内部で動く恐れがあるため、栗石の隙間に碎石を詰めました。



←写真9
石垣の復元
本来は石垣が存在していた場所には、石垣を一段並べました。

長柄櫓周辺の発掘調査を行いました



図1 長柄櫓周辺の発掘調査箇所

長柄櫓は津山城の南西にある櫓です。江戸時代の長柄櫓は文字通り、「長柄櫓」という柄の長さが2間以上の櫓を収めていた櫓でした。この石垣が一部孕んでおり、今年度から石が動いているかを確認するため、三次元計測を行い、観測することとなりました。あわせて、石垣周辺の地山の高さや、遺構の有無を調べるため、石垣周辺の5カ所で発掘調査を実施しました。

1. 調査区1、2 昇櫓石垣の調査

長柄櫓の西隣にある昇櫓石垣の下に設定した調査区です。江戸時代の地表面の高さや、地山（元々の山）の高さ、根石（最下段の石）の状態の確認を目的としました。

調査区1では、現地表面から約10～15cmで地山を確認しました。そこから地山を1.2m以上掘込み、根石の下及び石垣の前面に河原石を充填していることが分かりました（写真10）。石垣前面の河原石は直径20cm前後です。河原石を充填し、並行して石垣を積み、江戸時代の地面の高さまで埋められています（写真11）。

調査区2は、調査区1のように地山の掘込みは明確ではありませんが、調査区1同様、地山を掘込み、河原石



写真10 調査区1（西から）赤点線が地山の掘込み

を充填している状況がみられました。埋め戻した土は土と河原石や角礫が交互にみられました（写真12）。また、表土直下に固く締まった面がみられたことから、江戸時代の地表面は現在の地表面とあまり変わらない高さであったことが確認できました。

調査区1、2からは、地山を掘り込み、底に河原石を敷き、根石を据え、石垣の前面には河原石を充填していたことが分かりました。掘込み部分の埋土は土や角礫などによって埋め戻されていたと推測されます。



写真11 調査区1壁面（南から）赤点線が地山の掘込み



写真12 調査区2壁面（西から）赤点線が地山の掘込み

2. 長柄櫓天端面の調査

調査区3では、遺構の有無の確認や、石垣背面の状況確認を目的として設定しました。長柄櫓は平成元年に部分的に調査を実施しており、北東隅で櫓の基礎と考えられる石列と排水溝が確認されています。

調査の結果、一部で河原石がまとまって検出されましたが、建物に伴うものかどうかは分かりません。河原石の隙間から現代の遺物がみられたことから、後世による攪乱の可能性が高いと考えられます。

一方、石垣背面の裏込めの栗石は幅1.6～2mにわたって確認されました（写真13）。さらに、栗石の背面土の状況を確認したところ、石垣築造に伴う盛土が確認されました。この土からは複数の瓦片や土師器皿が出土しているため、少なくとも築城以降に何らかの掘削が行われたことが分かりました。